

## 夏目漱石「琴のそら音」考

——「余」の見た「幽霊」のもたらしたもの——

宮 蘭 美 佳

五〇

夏目漱石「琴のそら音」は、明治三十八年五月、小山内薫の主宰する雑誌「七人」に、「夏目漱石」の筆名で掲載され、その後、明治三十九年五月『漾虚集』（大倉書店・服部書店）に収録された作品である。

『漾虚集』に収録された作品であることから、これまで独立した一作品としてよりは、『漾虚集』の一部として論じられることの多かった作品である。

「琴のそら音」は、『漾虚集』の中では比較的性格の弱い、いわば間奏曲的作品であり、『猫』四も、『続々篇』ではじまった、実業家金田糾弾、金力批判が展開されるが、苦沙弥の旧友で、今は金田家の走狗となった鈴木藤十郎なる人物の登場に新味があるだけで、「続々篇に比すれば、特別に作者の感情の起伏も見られない。」と、同時期に書かれた『吾輩は猫である』と関連させて、『漾虚集』の個々の作品の位置付けを論じた内田道雄氏の論<sup>(1)</sup>は、そのような論の一つである。

また、「超現実的系列の作品には作者の現実感覚が深く滲透しているように、現実的系列の作品には神秘的な超現

実的志向が強く流入している。」<sup>(2)</sup>と、『濛虚集』の作品を「超現実的系列」と「現実的系列」に分け、その二つの交錯として作品を捉え、その例として、「琴のそら音」を挙げ、「琴のそら音」の表の主題は、魂の感応の問題を白昼の光の下に引き出して「笑ひ」によって否定するという構造になっているが、狸を引き合いに出すその否定のし方は、浅薄で卑俗であり、「春」の色調で染められたハッピーエンドはいかにも軽い。」<sup>(3)</sup>と述べている相原和邦氏の論も、『濛虚集』の中における「琴のそら音」の位置付けを論じた論に含まれる。

二つの論に共通しているのは、「琴のそら音」に対して積極的な評価がなされていないことであり、『濛虚集』にくまれる一作品として捉える立場からは積極的な評価がなされなかったと言えよう。

これらの論に対して、「琴のそら音」を独立した一作品として、論じたものとしては、太田三郎「夏目漱石「琴のそら音」とその背景」<sup>(4)</sup>が、早い時期のものとして挙げられる。

漱石が超自然的な現象を信じていたとはおもえない。「琴のそら音」という作品の題名は実体なきものをあらわす象徴的なつけかたであるし、狸の話で余の心理の動きは理論的に説明されてしまっている。ただサスペンスをおく手法は漱石が晩年の作品にまで用いつづけたところである。漱石の文学にたいする態度の根本がそこにみえてるといつてよからう。

氏は、このように述べ、晩年の作品にも用いられているサスペンスを置く手法が、すでに用いられている作品としてこの作品を評価している。この作品については、近年になってようやく、赤井恵子『「琴のそら音」論——法学士の言う「常識」とは?』<sup>(5)</sup>や、山崎甲一「漱石「琴のそら音」——出過ぎた洋燈の穂、幽霊論」<sup>(6)</sup>、谷口基「「琴のそら音」論——その構造に潜むもの」<sup>(7)</sup>などの、「琴のそら音」を『濛虚集』から独立した一作品として、正面から論じた論が出揃いつつある。

ところで、「琴のそら音」において主に描かれているのは、「余」の幽霊体験である。また、その前の津田君の話の

中にも、死ぬ前に鏡の中に姿を現した軍人の妻の話が語られている。この作品において「幽霊」は重要な位置を占めている。この幽霊に関しては、「津田君は、K君のこの心的系路を四段にわけて説明して居る。(一)類推。(二)連想。(三)幻覺。(四)自覺。」と、筆者が津田君に仮託して「心的系路」を分析した同時代評(眞多樓「七人(七)琴のそら音(夏目漱石)」「帝國文學」明治三十八年六月)において、早くも論じられている。

「余」の心理状態については、この同時代評で説明がいついてしまっているとされているのか、その後の、この作品における「幽霊」に関する見解を見ていくと、漱石が明治二十五年五月に発表した「催眠術」と関連づけ、「この翻訳文は学生時代のものであるが、漱石の頭の中に残っていたとおもえる。「琴のそら音」においてもその根本は自己催眠である。」とする太田三郎氏<sup>⑧</sup>、「琴のそら音」の場合、漱石が「読んで見」て「種々の暗示」を得たのは、普通の意味での「小説」ではなくてラングの『夢と幽霊』だったことは、疑うべくもないのである。」とラングの『夢と幽霊』の影響を指摘する塚本利明氏<sup>⑨</sup>、「余」が露子の幻を見る場面に「このあたり、「怪談牡丹灯籠」を頭においていることは、許婚の名をわざわざ「露子」としていることでも明らかである。」と、落語の影響を見ている水川隆夫氏<sup>⑩</sup>のように、もっぱら影響関係の指摘がなされてきた。

このような観点に加えて、「余」の「幽霊」体験を考えるにあたっては、もう一つの観点を必要とすると考える。それは、当事者の「余」にとつて「幽霊」体験がどのような意味をもったものであったか、という観点である。また、「余」の幽霊体験を津田君も「余」の話として聞いていることから、津田君における「余」の幽霊体験の意味も合わせて考える必要があると考え、「余」と津田君の人物形象を考慮に入れつつ、本論で考察を加えて行くことにする。さらに、「余」と津田君の友人関係に対して、「余」の幽霊体験の果たした役割についても、考察を加えて行くことにしたい。

注

- (1) 内田道雄『濛虚集』の問題「文学」一九六六年七月 岩波書店
- (2) 相原和邦『濛虚集』の性格「日本文学」一九七二年六月 日本文学協会編集 未来社刊
- (3) 「學苑 文学と家政」一九六七年八月 昭和女子大学光葉会
- (4) 「国文学 解釈と教材の研究」一月臨時増刊号 一九九四年一月 學燈社
- (5) 「文学論藻」一九九四年二月 東洋大学国文学研究室
- (6) 「日本文学」一九九三年十二月 日本文学協会編集・刊行
- (7) 前掲「夏目漱石「琴のそら音」とその背景」
- (8) 塚本利明「「ロード・ブローラムの見た幽霊」について」専修大学人文科学研究所月報 一九八三年六月 専修大学人文科学研究所
- (9) 水川隆夫『漱石と落語 江戸庶民芸能の影響』一九八六年五月 彩流社 一四二頁

一一

津田君の人物形象を、彼の言葉の面から考えていくことにする。仕事が忙しく「僕も氣楽に幽霊でも研究して見たいが」できない「余」に対して、津田君は「幽霊を研究する」立場にある。「余」と津田君はこの点において明らかに異なる。このことは、津田君の人物形象について考えるにあたって、手掛かりを与えてくれよう。次に引用するのは、津田君の言葉とそれに対する「余」の心情である。

「夫でも主人さ。是が俺のうちだと思へば何となく愉快だらう。所有と云ふ事と愛惜といふ事は大抵の場合に於て伴なうのが原則だから」と津田君は心理學的に人の心を説明して呉れる。學者と云ふものは頼みもせぬ事を一々説明してくれる者である。(傍点原文)

津田君は「學者」と位置づけられている。さらに、「學者と云ふものは頼みもせぬことを一々説明してくれ、ものである。」とされている。「頼みもせぬ事を一々説明する」とは、相手の必要としている知識を与えるために説明するのではなく、説明することそのものが目的になっている状態である。このことは、津田君が「學者」であるのは、説明することが自己目的化していることを特徴とする、特殊な説明づけの方法を所有しているからであることを示しているのである。逆に言えば、その説明づけの方法の所有によって、津田君は「學者」と位置づけられる。

その特殊な説明づけの方法が向かう対象が、津田君の場合は幽霊である。ここで挙げられているのは、「必ず魂魄文は御傍へ行つて、もう一遍御目に懸ります」と言っていた細君の姿が、死ぬときに戦場にいる夫の鏡に「青白い細君の病氣に襲れた姿がスーとあらはれた」という、人間が死ぬ前に、その人の姿が離れている人の所に現れるという現象である。津田君は次のように述べている。

「こゝにもそんな事を書いた本があるがね」と津田君は先刻の書物を机の上から取り卸しながら「近頃ぢや、有り得ると云ふ事は証明されさうだよ」と落ち付き拂つて答へる。

また、次のようにも述べている。

「あゝ、つまりそこへ歸着するのさ。それに此本にも例が澤山あるがね、其内でロード・ブローアムの見た幽霊杯は今の話しと丸で同じ場合に屬するものだ。中々面白い。君ブローアムは知つて居るだらう」

机の上にあつた本の内容と関連させる形で、軍人の妻の幽霊に関して、津田君独自の自己目的化した説明を繰り広げていく。ここで「同じ場合に屬する」と津田君によって、説明されている「ロード・ブローアムの見た幽霊」につ

いて、塚本利明氏の詳細な研究がある。

漱石がブローラム卿の見た「幽霊」としたのは、正確には“wraiths”のことなのである。

では、wraithとは何か。研究社の『新英和大辞典』（一九八〇）によれば、この語はまず「人の臨終前後に現われるというその人自身の（生霊）」を意味し、なお一般に「亡霊、幽霊」の意味にもなる。や、詳しく言えば、ある人間の wraithとは、通常「離れたところにいる人々に現われて、その人が間もなく死ぬことを予告する」(Brewer's Dictionary of Phrase and Fable, 1963)ものである(1)。

津田君は、鏡に現れた妻の姿を“wraiths”であると説明しているのである。さらにこの“wraiths”を、彼は次のように説明している。

「遠い距離に於て、ある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的變化を起すと……」

“wraiths”は、「(人の臨終前後に現われるというそのひと自身の)生霊」、「離れたところにいる人々に現われて、その人が間もなく死ぬことを予告する」ものである以上、その出現には、「現れる人の死」という要素が必ず伴うものである。だが、この「ある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的變化を起す」という津田君の説明では、「現れる人の死」という要素は重要視されていない。むしろ、細胞と細胞が「感じる」ことによって現象が起きるわけであるから、細胞が生きた状態である必要がある。ゆえに、津田君の説明に従えば、細胞の持ち主が瀕死であるよりは、元気な方がより現象は起きる、ということになる。

津田君を「學者」と位置づける、彼が所有する自己目的化した説明づけの方法の全体がここで明らかとなった。まじめればそれは、「ある人の姿が、離れている人の所に現れる」という現象を、“wraiths”生霊と位置づけ、それを「脳

の細胞」の「化學的變化」に置き換えること。」である。この自己目的化した説明づけの方法は、津田君が「研究」の途上にある以上、完成したものではないであろう。しかし、この説明づけの方法を自ら所有し、それを完成させる努力をすることが、「學者」「文學士」として、津田君を位置づけさせている<sup>20</sup>。ゆえに、逆に言えば、この自己目的化した説明づけの方法全体は、「學者」「文學士」以外の人々には閉ざされたもの、「秘密」となっているものでもある。

このような説明づけの方法を所有することが、当時は「學者」にふさわしいことであつた。次に引用するのは、一柳廣孝氏の論である。

欧米では現在、続々と心靈學に関する学会が成立し、そこでは「靈魂の實在と其の不滅」の客觀的説明が試みられているとして、二十世紀の學問の第一の問題は「心靈」であると主張した黒岩涙香らの言説が象徴するように、催眠術などによつて生じた不可思議な精神現象を説明し得る「學」<sup>21</sup>従来の「科学」の枠を越える新「科学」として、心靈學は受容されるのである。こうして明治四〇年前後には、「哲学雜誌」「丁酉倫理會倫理講演集」などアカデミズム關係の雜誌や、渋江保、平井金三、高橋五郎らの著作を媒介にして、次々に欧米の心靈學研究の成果がリアル・タイムでもたらされることになる。

明治四十年前後には、「従来の科学の枠を越える新「科学」として、心靈學は受容され」ていたことが述べられている。津田君が、彼の自己目的化した説明づけの方法を所有していることが、彼を「學者」「文學士」として位置づけるものであることは、前に述べたが、このような当時のアカデミズムの潮流という背景があつて初めて、「學者」「文學者」という津田君の位置づけが可能となるのである。

注

- (1) 前掲 塚本利明「ロード・ブローアムの見た幽霊」について」  
赤井恵子氏が、「もとから津田君の『聯想』と、婆さんの考え方は、酷似していると言わざるをえない。」(前掲『琴のそら音』論——法学士の言う「常識」とは?)と、津田君と婆さんの考え方の類似を指摘しているが、婆さんは、「翌日の御業に就て綿密なる指揮を仰ぐ」(月に二三返は傳通院邊の何とか云ふ坊主の所へ相談に行く様子だ)と、ひたすら他人の説明づけの方法に依存し、自ら説明づけの方法を構築しようとする姿勢は見られない。その点で、津田君と婆さんの考え方は、明らかに異なる。
- (2) 一 柳廣孝「八科学Vの行方漱石と心靈学をめぐって」『文学』一九九三年夏 岩波書店

二二

「文學士」である津田君に対して、「余」は、自らを「余は法學士である。」と自己規定している。

余は法學士である。刻下の事件を有の儘に見て常識で捌いて行くより外に思慮を廻らすのは能はざるよりも寧ろ好まざる所である。幽霊だ、祟だ、因縁だ杯と雲を攫む様な事を考へるのは一番嫌である。

「法學士」という「余」の自己規定と、「刻下の事件を有の儘に見て常識で捌いて行く」という、物事の説明づけの方法とが、分ちがちがたく結び付いている。言い換えると、「余」が、「法學士」である、という自己規定を可能にしているのが、この「余」の物事の意味づけの方法である。また、「余」は次のようにも述べている。

「僕は法學士だから、そんな事を聞いても分らん。要するにさう云ふ事は理論上あり得るんだね」余の如き頭腦不透明なるものは理窟を承るより結論丈呑み込んで置く方が簡便である。



彼の物事の説明づけの方法に特有なのは、結論を物事の説明づけの象徴としていふことである。このことは、逆に言えば、結論が分からなければ物事が説明づけられない、ということになる。結論が分からなければ、それまでに起こった出来事は、「余」の中で意味付けられず、不安定な宙吊りの状態になる。次の文はこのことをよく示している。

細い針は根迄這入る、低くても透る聲は骨に答へるのであらう。碧瑠璃の大空に瞳程な黒き點をはたと打たれた様な心持ちである。消えて失せるか、溶けて流れるか、武庫山卸しにならぬとも限らぬ。此瞳程な點の運命は是から津田君の説明で決せられるのである。

「此瞳程な點の運命は是から津田君の説明で決せられるのである。」と述べられているが、津田君の話が終わるまで、「余」の中で、「瞳程な黒き點」は意味付けられないまま、不安定な状態でありつづけるのである。

「余」の説明づけの方法と関連して、「余」の使う言葉の特徴を考えてみると、「余」は、「幽霊だ、祟りだ、因縁だ」と云を攫む様な事を考へるのは一番嫌である。「實を云ふと幽霊と雲助は維新以来永久廢業した者とのみ信じて居たのである。」とあるように、自分の述べる言葉としては、「幽霊」という言葉を、極力排除していることが挙げられる。この排除は、「余」の「法學士」としての自負を伴った自己規定、さらに、「維新後」の新しい世界を生きるものとしての、自負の念に基づくものである。

「こゝにもそんな事を書いた本があるがね」と津田君は先刻の書物を机の上から取り卸ながら「近頃ちや、有り得ると云ふ事は證明されさうだよ」と落ち付き拂って答へる。法學士の知らぬ間に心理學者の方では幽霊を再興して居るなと思ふと幽霊も愈く馬鹿に出来なくなる。知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に關しては文學士に盲従しなければなら

ぬと思ふ。

この自負の念に基づく「幽霊」という言葉の排除が、津田君の幽霊に関する自己目的化した説明づけの方法によって、単なる「幽霊」に対する無知へとおとしめられてしまう。また、津田君の自己目的化した説明づけの方法は、「文學士」以外の人間には、その全体は閉ざされている、つまり「秘密」とされているがゆえに、津田君が意図しないまでも、「自慢と相手をやつつけるための形式的な手段として述べられる」<sup>(1)</sup>効果を發揮している。その結果、「余」は、「知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に關しては法學士は文學士に盲従しなければならぬと思ふ。」と、「法學士」という自己規定と、それと密接に結び付く、結論を物事の説明づけの象徴とする、「余」の説明づけの方法の妥当性も、揺るがされたのである。さらには、相手への全面的依存を考へるほど、自己の独立性自体が揺るがされてしまったのである。

ところで、この二人の人間関係は、どのように特色づけられるのであろうか。二人は、「津田君と余は大學へ入つてから科は違ふたが、高等学校では同じ組に居た事もある。」という間柄であり、学校を出た現在も、下宿を訪れていることから、この二人は一般的な意味で「友人」であるといえよう。このことについて、谷口基氏の論の中で、触れられている。

津田君の余裕ある学究生活、その言動や下宿のたたずまいが醸し出すアカデミックな空気。八余も遠からぬ過去、同じ空気の中で呼吸してきた人間である。彼が卒業以來頻々と親友の下宿を訪ねていたとすれば、それは過去の空気を懐しんでのことであろう。現在の津田君が纏う空気には、八余が生を営む現在とは異なる懐しい世界の匂いがある<sup>(2)</sup>。

懐かしい過去の空気をもたらすという役割を果たす人間として、「余」は津田君を位置づけている。「余」にとって

は、津田君の關係はこの役割によつて規定されている。このように、役割分担された友人關係について、ジンメルは次のように述べている。

この分化した友人關係は、われわれをある人間とは感情の側面において、他のある人間とは精神的な共同から、第三の人間とは宗教的な衝動のために、そして第四の人間とは共通な体験によつて結合させるが、この友人關係は配慮の問題にかんして、自己顯示と自己黙秘にかんして、まったく独特の結合をあらわす。それが要求するのは、友人がまったくその關係に含まれていない関心領域と感情領域をたがいにのぞき込まず、したがつてそれにふれることは、相互的な理解の限界を苦痛と感じさせるということである<sup>(3)</sup>。

津田君が、「夫だから宇野の御嬢さんもよく注意し玉ひと云ふ事さ」と、現在の「余」に關係する、「宇野の御嬢さん」についてまで、津田君の自己目的化した説明の方法を適用しようとすることは、「余」にとつては、過去をもたらずという役割を越境して、「余」の現在に、津田君が侵入してくることになる。これは、「まったくその關係に含まれていない関心領域と感情領域」を、のぞき込むことになり、「相互的な理解の限界を苦痛と感じさせる」ことになる。それゆえに、「余」は、「うん注意はさせるよ。然し萬一の事がありましたら屹度御目に懸りに上がりますなんて誓は立てないのだから其方は大丈夫だらう」と洒落て見たが心の中は何となく不愉快であつた。」と、不快の念を抱くのである。

## 注

- (1) G・ジンメル、居安正訳「社会学」(上卷)一九九四年三月 白水社 三七二頁。参考までにこの箇所の前後を引用しておく。「秘密という形式によつて特色ある価値強調を獲得し、この形式において秘密とされた事実の内容上の意義は十分にしばしば、他者たちがまさしくそれについてなにも知らないということにまったく道をゆずる。子供たちのあいだでは、ひと

りが「僕はお前の知らないことでも知っている」と他の者たちに言えるということに、しばしば誇りと自慢とが理由づけられる。——しかもこれはきわめてひろくひろがり、ためにそれがまったくのでたらめであり、まったく秘密のないばあいである。自慢と相手をやつつけるための形式的な手段として述べられるほどである。」

- (2) 前掲 谷口基「『琴のそら音』論——その構造に潜むもの——」  
(3) 前掲 G・ジンメル、居安正訳『社会学』（上巻）三二六七頁

#### 四

「余」は、夜道を一人家に帰る。

あの音はいやに伸びたり縮んだりするなど考へながら歩行くと、自分の心臓の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりする様に感ぜられる。仕舞には鐘の音にわが呼吸を合せ度なる。今夜はどうしても法學士らしくないと、足早に交番の角を曲がるとき、冷たい風に誘はれてポツリと大粒の雨が顔にあたる。

津田君によつて、「法學士」という自己規定と、物事の説明づけを揺るがされてしまったまま「余」は、帰途に就いた。「余」は、「今夜はどうしても法學士らしくないと」と、そのことを自覚もしている。途中で、彼は極楽水という所を通りかかる。

極楽水はいやに陰氣な所である。近頃は兩側へ長屋が建つたので昔程淋しくはないが、その長屋が左右共闕然として空家の様に見えるのは餘り気持のいゝものではない。貧民に活動はつき物である。働いて居らぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水の貧民は打てども蘇み返る景色なき迄に靜かである。實際死んで居るのなら

う。

「貧民に活動はつき物である。」と、「余」の説明づけに従えば、活動しててしかるべき「貧民」が「働いて居らぬ」のである。「余」の説明づけの方法が、揺るがされた状態であるのみならず、「余」の置かれた状況も、それがうまく働かないものとなったのである。このうまく働かない状況は、「余」に「死」ということについての再考をもたらしした。

死ぬと云ふ事が是程人の心を動かすとは今迄つい氣が付かなかった。氣が付いて見ると立つても歩行いても心配になる、此様子では家へ歸つて蒲團の中へ這入つても矢張り心配になるかも知れぬ。何故今迄は平氣で暮して居たのであらう。

説明づけの方法が揺らぎ、また、うまく働かない状況に置かれることによって、「余」は、「死ぬと云ふ事が是程人の心を動かす」ものである、ということに対する驚きを発見した。このことによって「余」の中で、説明づけの方法がうまく働かない状況は、「死と云ふ事が是ほど人の心を動かす」ものであったという認識によって、「驚き」と結び付くものとなったのである。

説明づけの方法の揺らぎと、うまく働かない状況は、「余」に「驚き」ばかりではなく、「恐怖」も、もたらす。茗荷谷の坂で、「火の消えた瞬間が露子の死を未練もなく拈出した。」ことよって、「余」は、婚約者露子の死が心配になった。彼は、露子の容体を一刻も早く確かめる必要があったのだが、「今夜入らしつちや、婆やは御留守居は出来ません」という、婆やの言葉で、翌朝まで露子の状態は全く分からないことになってしまった。

暫くすると遠吠がはたと已む。此夜半の世界から犬の遠吠を引き去ると動いて居るものは一つもない。吾家が海の底へ沈んだ

と思ふ位静かになる。静まらぬは吾心のみである。吾心のみは此静かな中から何事かを豫期しつゝ、ある。去れども其の何事なるかは寸分の観念だにない。性の知れぬ者が此闇の世から一寸顔を出しはせまいかといふ懸念が猛烈に神経を鼓舞するのみである。

ここに挙げられている恐怖は、「余」自身の死に対する恐怖、婚約者の露子を死によつて失う、喪失に対する恐怖ではない。なぜなら、「性の知れぬ者が此闇の世から一寸顔を出しはせまいかといふ懸念が猛烈に神経を鼓舞するのみである。」と述べているように、恐怖の対象が非常に漠然としたものであることを、示しているからである。恐怖の対象が「死」であるならば、これまでに「余」は、「死ぬと云ふ事が是程人の心を動かす」ということを「驚き」をもつて理解しているのであるから、恐怖の対象が「死」であると、はつきり認識できるはずである。

恐怖の理由は、次のように考えられる。「余」の物事の説明づけの方法は、結論が分からなければ、物事が説明づけられないという特徴がある。ゆえに、露子が生きているのか死んでいるのかという「結論」が、全く分からない今夜の状況では、「余」の物事の説明づけの方法は、全く役目を果たさない。その結果、「余」の周囲の出来事は、全く意味付けられないものとなつてしまい、意味を剥奪された不気味なものとして、「余」の目に映つてしまうからである。

この恐怖から解放される唯一の方法は、結論を得て、結論を物事の説明づけの象徴とする「余」の物事の説明づけの方法を、普段と変わりなく働く状態にすることである。「然し或は腹工合のせみかも知れまい」と、何とか恐怖の意味づけようとする「余」の必死の努力にもかかわらず、結論である露子の容体が不明である間、「余」の恐怖は続くのである。

翌朝、露子の家に駆けつけた「余」は、露子の「え、風邪はとづくに癒りました」の声に、彼女の無事を確認する。

日本一の御機嫌にて候と云ふ文句がどこかに書いてあつた様だが、こんな氣分を云ふのではないかと、昨夕の氣味の悪かつたのに引き換へて今の胸の中が一層明かになる。なぜあんな事を苦にしたらう、自分ながら愚の至りだと悟つて見ると、何だか馬鹿々々しい。

露子の無事が確認され、結論を得たことで、「余」の説明づけの方法は、普段通り何事もなかつたかのように機能しだした。「余」は、完全に恐怖から解放された。残つたのは、昨夜の「死ぬと云ふ事が是程人の心を動かす」ということに対する「驚き」と、説明づけの方法が働かないことのもたらした、「恐怖」の記憶のみである。

また、露子の無事が確認されたことは、津田君の自己目的化した説明の方法が、「余」の現在に属する露子には、適用できなかつたことを意味する。過去をもたらず役割を越え、「余」の現在に津田君が干渉することはなかつたのである。「余」にとつての津田君の役割を、津田君は順守したことになる。ゆえに、「相互的な理解の限界を苦痛と感ぜさせる」、つまり「余」が、津田君を不愉快に思うこともなくなつたのである。

注

- (1) 越智治雄は「琴のそら音」における余の一夜の体験、それは「夜と云ふ無暗に大きな黒い者」に触れることであつた。それは法学士の世界に無縁なもう一つの世界である。この小説の中心になるのがこの闇の質感の重さであることは疑いがな<sup>い</sup>。」と述べている。(越智治雄「漱石の初期短編(承前)」『國文學解釈と教材の研究』一九七〇年八月 學燈社)

## 五

床屋に行った「余」は、床屋に集まっている人々が、幽霊について話しているのを耳にする。

「近頃はみんな此位です。揉み上げの長いのはにやけて、可笑しいもんです。——なあに、みんな神経さ。自分の心に恐いと思ふから自然幽霊だつて増長して出度ならあね」と刃についた毛を人さし指と拇指で拭ひながら又源さんに話しかける。

「全く神経だ」と源さんが山櫻の烟を口から吹き出しながら賛成する。

「神経つて者は源さんどこにあるんだらう」と由公はランプのホヤを拭きながら真面目に質問する。

「自分の心に恐いと思ふ」ことは、神経のせいであり、「恐い」と思う対象は実体として存在しない。そして、「自分の心に恐いと思ふ」ことが幽霊を出現させる、という職人の見解が示されている。この見解に従えば、恐怖の念を起させる対象が、実体として存在しないにもかかわらず、恐怖の念が起ることが、幽霊の原因であるということになる。言い換えれば、幽霊とは、恐怖の念そのものである、ということになる。この職人の見解に、居合わせた源さんも、由公も賛成しているのである。

同じ見解は、『浮世心理講義録有耶無耶道人著』の中にも示されている。この本を読んでいた松さんが、「急に大きな聲を出して面白い事がかいてあらあ」と笑い出したことが示しているように、「心理講義録」とは銘打ちながら、けつしてアカデミズムに属することのない、庶民の好奇心に応える内容の本である。この本の中に「何で狸が婆化しやせう。ありやみんな催眠術でげす」という狸の話が出てくる。

「肥桶を臺にしてぶらりと下がる途端拙はわざと腕をぐにやりと卸ろしてやりやしたので作藏君は首を縊り損つてまこくして居りやす。こ、だと思ひやしたから急に榎の姿を隠してアハ、、、と源兵衛村中へ響く程な大きな声で笑つてやりやした。すると作藏君は餘程仰天したと見えやして助けて呉れ、助けて呉れと禪を置去りにして一生懸命に逃げ出しやした……」

狸はこのことに関して、「婆化され様と云ふ作藏君の御注文に應じて拙が一寸婆化して上げた迄の事です。」と述べている。狸が作藏君にしたことは、「急に榎の姿を隠してアハ、、、と源兵衛村中へ響く程な大きな声で笑つてや



りやした。」ということのみである。それに対して、作藏君は「餘程仰天した」のである。狸が作藏君にしたことは、おどかしたことだけである。ゆえに、狸が人を化かすということの本質は、単に狸が人を驚かすことにほかならない。

「余」の目の前で、幽霊や狸が人を化かすことの本質は、「恐怖」「驚き」の念である、という見解が示された。この見解は、昨夜の経験が、対象が実体として存在しない「驚き」「恐怖」の念をもたらしたものであることと、まさに一致する。ゆえに「余」は、「して見ると昨夜は全く狸に致された譯かなと、一人で愛想をつかし乍ら床屋を出た」というように、この見解に全面的に賛成したのである。

さらに、「文學士」津田君の所有する自己目的化した説明方法が、当時のアカデミズムの潮流を背景にしていたのに対して、この「幽霊」に対する見解は、床屋に集まった松さんや由公といった、庶民の見解を背景として持っている。これは、「文學士」と異なる、「法學士」の物事の説明づけの方法、「常識」で捌いて行くことに、まさに合致する。「余」は、津田君の自己目的化した説明づけの方法に匹敵する、「法學士」という自己規定にふさわしい、「幽霊」に関する説明づけを手に入れたのである。同時にそれは、津田君によって脅かされることのない、確固とした自己の独立性を手に入れることでもあったのである。

最後に結末部分に関して、考察を加えることにする。

気のせぬか其後露子は以前よりも一層余を愛する様な素振に見えた。津田君に逢つた時、當夜の景況を残りなく話したら夫はい、材料だ僕の著書中に入れさせて呉れると云つた。文學士津田眞方著幽霊論の七二頁にK君の例として載つて居るのは余のことである。

赤井恵子氏はこの箇所について、次のように述べている。

「当夜の景況」は、それをどう「余」がとらえたかを無視され「材料」として、つまり不気味な体験談（ただのフォークロア）として「文学士」の著書に定着させられてしまったらしい。むろん「余」は法学士らしくなかったあの一晚の心境を津田君に暴露などしてはいないだろう<sup>(1)</sup>。

津田君は、「余」が「當夜の景況」を、どうとらえたかは無視し、「余」は、「法学士らしくなかったあの一晚の心境を津田君に暴露などしてはいない」。いずれにせよ、幽霊の本質は「驚き」「恐怖」の念である、という、「余」の幽霊に対する見解を、津田君は知らないのである。津田君にとって、「余」の幽霊に対する説明づけは、知る由もない「秘密」となっている。この「秘密」の効用についてジンメルは、次のように述べている。

ところでこのさい決定的なことは、秘密が第一級の個人主義化の契機であり、しかも典型的な二重の役割においてそうであるということである。すなわち第一に、強い個人的な分化状況の社会的状態は、高い程度において秘密を許し、さらにそれを要求するということであり、第二に、逆に秘密はそのような分化状況を支え、さらにそれを高めるということである<sup>(2)</sup>。

「余」の「幽霊」に対する説明づけは、「余」の津田君に対する独立をもたすものであった。それが、「秘密」にされることで、一層独立をもたす力が強められるのである。確固たる独立性をもった「余」は、津田君を不快に思うことはなくなり、友人の努力の成果を素直に認めることが、できるようになった。それゆえに、友人の本のことを、自分の本であるかのように述べているのである。

一方津田君の持つ、自己目的化した説明づけの方法は変化していない訳であるから、津田君は、「余」が「はつと露子の事を思ひ出した」ことも、「ある人の姿が離れている人の所に現れる」現象として捉えたのである。津田君の

説明づけでは、対象となる人が生きている方が、より現象がおきるわけであるから当然のことであろう。ゆえに、津田君は「余」の話を「い、材料」と判断したのである。またこのことよって、津田君にとって単に説明づけを与える対象から、情報提供者へ「余」の位置づけが変化した。津田君にとって、「余」はより重要な人物となったのである。

「余」の幽霊体験を通して、「余」と津田君のつながりは一層強くなった。「余」の幽霊体験は、結果として二人の友情の深まりをもたらすものであったのである。

注

- (1) 前掲 赤井恵子「『琴のそら音』論——法学士の言う「常識」とは？」
- (2) 前掲 G・ジンメル、居安正訳 『社会学』（上巻）三七五頁

本稿は、平成八年七月三十一日、梅花短期大学で行われた、キリスト教文学会関西支部例会での口頭発表をもとに、論文化したものである。多くの方々のご教示を願いたい。